

# 短期ホストファミリー体験における異文化に関する学びの構造

—AUC—GS学習モデルを用いた認知行動的反応の分析—

奥西 有理・田中 共子<sup>\*</sup>・井上 由布子<sup>\*\*</sup>

岡山理科大学学生体医工学科・教養教育センター

<sup>\*</sup>岡山大学社会文化科学研究科

<sup>\*\*</sup>岡山大学文学部卒

(2013年9月26日受付、2013年11月5日受理)

## 1. はじめに

日本の高等教育機関における留学生数は増加し、異文化を背景に持った外国人留学生と日本人が日常的に出会い、交流する機会が増加している。留学生の受け入れは、国家レベルの大掛かりな政策として推進される中、着実に数を伸ばし、先進国の目安とされる10万人水準に達するようになった。その一方で、留学生とホスト社会の構成員である日本人との対人関係形成には困難があることが、多くの先行研究により指摘されてきた(奥西・田中, 2009; 田中・藤原, 1992; 横田・白土, 2004)。本音をはっきりと口にするのを避け、相手の気持ちを慮った結果、曖昧で間接的な伝え方をするという日本式コミュニケーションは、出身文化に拘わらず留学生にとって共通した異文化葛藤原因となっているという(Nakano, Okunishi & Tanaka, 2013; 奥西, 2012; 田中, 2000)。留学生は、日常的な日本人との接触において、日本人の言葉や行動の真意を理解することが出来ず、そのことが関係づくりの障害になるという。留学生がホストとの信頼関係に基づく人間関係を構築出来ていれば、将来的な国際間のコラボレーションに発展する可能性があったことを考えると、留学生受け入れという貴重な人的資源への投資は未だ十分に出来ておらず、日本における留学生交流はその成果を十分に発揮出来ていないという状況が浮かび上がる。

このような現状の下、留学生を週末の2、3日間など短期間家庭に招き入れて日本人家族と一緒に生活してもらい、日本人や日本文化への理解を高めてもらうことを目的とした国際交流の試みが行われるようになっている。このような交流体験は、ホストやゲストにどのような学びや、心境の変化をもたしているのだろうか。留学生交流の質的側面の評価と関わるといえるホームステイ交流の成果や学びに関しては、交流実態の把握や満足度の調査に留まりがちである(廣田・岡, 2009; 岡, 2005)。交流の体験が、ホストやゲストの心理面に与える影響や異文化に関する学び、あるいは関係づくりへの影響等に関しては、十分に検討されてこなかった。

そこで本研究は、短期ホームステイ交流における異文化に関する学びについて、留学生を受け入れる日本人ホストの側に焦点をあてて検討する。交流の体験を文化的情報の提供者であるホストにとっての学びから見えていくことで、多面的に把握することが出来る。比較的長期のホストファミリーを対象とした調査においては、ホストが留学生との日常的な関わり合いを通して、異文化に対する気づきや対話スキルを向上させていき、最終的にはゲストの日本文化理解向上を促して適応支援の役割を果たすようになるというモデルが提示されている(奥西・田中, 2003)。本研究では、留学生との異文化接触レベルが比較的低度の短期ホームステイのホストファミリーを取り上げ、その活動を通して、ホストがゲストとの文化差をどのように捉え、どのように対処したのか、という観点からホストの異文化に関する学びをみていく。それにより、ホームステイ交流の教育的意義について、ホストの側から捉えていきたい。

## 2. 研究方法

### 2-1 研究対象者

数日程度の短期ホームステイの受け入れを経験したことのあるホストファミリー13名を研究対象とした。X

県とY県の、ホストファミリーを斡旋している団体に依頼し、週末を中心としたホームステイの受け入れ経験があるファミリーを紹介してもらった。また、知人を通した縁故法も併用して調査依頼を行った。対象者の概要は、表1に示す。

表1 インフォーマント一覧

		性別	年代	ホスト経験回数	家族構成
1.	ホストA	男性	70代	50人以上	夫婦・子
2.	ホストB	女性	50代	不明（複数回）	単身
3.	ホストC	女性	50代	20人以上	夫婦・子
4.	ホストE	女性	60代	10人以上	夫婦
5.	ホストF	女性	50代	20人以上	夫婦・母
6.	ホストG	女性	40代	10人以上	夫婦・子
7.	ホストH	女性	70代	20人以上	夫婦
8.	ホストI	女性	60代	20人以上	単身
9.	ホストJ	女性	40代	10人以下	夫婦・子
10.	ホストL	女性	60代	50人以上	夫婦
11.	ホストM	女性	40代	10人以上	夫婦
12.	ホストO	男性	70代	10人以上	夫婦
13.	ホストP	女性	60代	10人以上	夫婦

2-2 調査内容

2012年の7月～11月に、1時間程度の半構造化面接を実施した。留学生を受け入れることで感じる心情を中心に、ホストファミリー活動を始めた動機、期間中の生活の様子、困ったこと、活動を通じて得たこと、活動にあたっての心構え等、自身の交流体験について、自由に語ってもらった。了承を得て、会話をICレコーダーに録音し、得られた語りを書き起こして分析に用いた。

2-3 分析

2-3-1 分析の枠組み

分析には、AUC-GS学習モデル（田中・中島，2006）のAUCの枠組みを用いた。AUC-GS学習モデルとは、異文化間教育の構成枠組みを示す6セルモデルである。これらを学べば異文化対応能力を向上させるための教育として有用であろうという学習内容の範囲を概念的に表す枠組みである。異文化接触に必要となると想定される能力を培うために必要な学習をまず2つのレベル、すなわち文化一般的な内容（General）と、文化特定的な内容（Specific）に分ける。文化一般レベルの学習とは、対象がどこの文化であっても、異文化との対応であれば必要となるような一般的な原則を学ぶこと、そして文化特定レベルの学習とは、ある特徴を持った特定文化を念頭に置き、その対応において必要なことを具体的に学ぶことである。その上で、文化学習を3段階に分けて捉え、第1段階目として、文化の違いに関する気づきがあるかどうかというAwarenessの段階、第2段階目として、違う文化同士の接触が葛藤や戸惑いの原因になることを理解しているかどうかというUnderstandingの段階、そして第3段階目として、文化の違いに対処出来ているかどうかというCopingの段階に順を追って分けて考えていくものである（表2）。この学習モデルにおいて異文化学習の3ステップとして提示されているAwareness（A段階）、Understanding（U段階）、Coping（C段階）について、本研究のインフォーマントが該当しているかどうかを、語りを基に判断し、短期ホストファミリーの異文化に関する学びの状況をタイプ別に整理した。以下に、インフォーマントの語りに基づいたタイプ分けの例を提示する。

表 2 AUC-GS学習モデル（田中・中島，2006）

段階	レベル	Culture General 文化一般	Culture Specific 文化特定
Awareness 気づき	AG	異文化の存在への気づき	AS 自文化を含む特定文化の存在や影響への気づき
Understanding 理解	UG	異文化接触一般の現象の知識と理解	US 特定文化における適応・不適応現象や特定文化自体の理解
Coping 対処	CG	異文化接触一般に求められる対応の仕方の原則	CS 特定文化の文化的理解に関わる対応の仕方

2－3－2 タイプ分けの例

タイプ分けの例示においては、間投詞などの冗長な部分は省き、方言は適宜標準語に変えた。また、もとの表現のままでは意味が通りにくい部分については、助詞や省略されたと考えられる単語を括弧内に補った。プライバシー保護のため、固有名詞は適宜記号化した。また、下線部は筆者らがタイプ分けに際して注目した部分である。

A段階

例) 「I国とかM国とかあの辺です。トイレ滞らすんです。滞れてるっていうのは、今掃除したっていうのにつながる。だから、綺麗なの、滞れてる方が。だから、本人たちが、トイレ使った後は滞らすわけですよ。」

U段階

例) 「やっぱり国が違うと、その子の感じ方も違うし、食べる物も違うし、宗教だって違う。大変なんですけど。」

C段階

例) 「注意しました。“悪い”って。“どうして駄目なんだ”って（聞かれた）。“日本ではそういうのは、駄目なんだから”って（説明した）。」

3. 結果

AさんからPさんまでの13名のインフォーマントが、それぞれどの段階に該当する学びを行っているかを、以下に紹介する。AUCの各段階につき、インフォーマントの学びがどのようなものであるかについて分析を行ったところ、3つのタイプに分類され、それらは、タイプⅠ：AUCの全ての学習がみられたホスト、タイプⅡ：ACの2段階の学習がみられたホスト、タイプⅢ：A段階のみの学習がみられたホスト、という3つのタイプであった（図1）。以下に各分類タイプごとに、ホスト1人1人の語りをみていく。

	A stage	U stage	C stage
タイプⅠ	ホストA/ホストG/ホストI/ホストL		
タイプⅡ	ホストB/ホストC/ホストE/ホストF/ホストH/ホストP		
タイプⅢ	ホストJ/ホストM/ホストO		

図 1 ホストファミリータイプ分類

### 3-1 タイプI：AUCの全ての学習がみられたホスト

1つ目のタイプは、文化の違いに対する気づき（A段階）、文化の違いが葛藤や戸惑いの原因になることについての理解（U段階）、そして文化の違いへの対処（C段階）の3段階全てをクリアしていたホストファミリーである。Aさん、Gさん、Iさん、Lさんがこのタイプに分類された。

#### ホストA

Aさんは、文化の違いに対する気づきがあり、ホームステイの体験を通して、その違いを感じる力が高くなっていった旨の語りがみられた。また、文化の違いがトラブルを引き起こしうると認識していると見られるU段階に相当する語りもみられた。文化の違いに対処が出来ているかどうか、すなわちC段階の対処に関しては、率直に伝えるコミュニケーションを行うことで、日本人にありがちな間接表現や曖昧表現の多用による誤解を避けることが出来ていることが、語りから推察出来る。この「ストレートな意思伝達」という多様な文化背景の人に対し汎用性のある対処方法を身に付けている一方で、C国の人への対処については、「付き合いにくい」と語り、その言動に違和感を抱えているが、その国の文化に焦点化した適切な対処方法は見いだせていない。C国という特定の文化に対する対処の面では課題があるものの、A段階、U段階、C段階すべての段階をクリアし、基本的な異文化対応が可能であるため、タイプIと認定することが出来る。

A段階：「（ホームステイを経験して）日本と違うのはどこか、というのをシビアに感じるようになった。前はただ、ああ、この国は暑い国だなとか、そういう感じしかしなかったけど。」

U段階：「相手の国のことも知らないと、受け入れる方も、ものすごく難しいよね。」

C段階：「僕はとにかくストレートにしか物を言わない。」「どちらかと言ったら嫌われてもいいから、ダイレクトに物を言う。裏があるって日本人はよく言う。曖昧というのは、裏があるから曖昧になる。けど、そういうのが僕にはない。全部、表だけ。そういうのをしたから、向こうの人もあんまりズケズケ言われて困る顔をしたことはあるけど、言ってくれないから困るということは無かった。」「C国人は一番付き合いにくい。美味しい、美味しい、って、口では言う。料理は残す。（他の）外国人は、「テイスティ」なんか言ったらぜーんぶ食べてしまう。C国人っていうのは、だから分からない。考えてることが。（思ってることを）言わない。言わなくて、しない。だから、感謝してるのかしてないのか分からないね。上手な表現の仕方は勉強してるけど、心から言ってる。まあ、口先三寸って感じ。」

#### ホストG

Gさんは、文化的距離の遠いイスラム教徒の留学生を受け入れたことで、異文化と接することは大変なことであるという認識を持つようになっていく。しかし、文化差への対処については、こちらのやり方を強制せず、相手のやり方に合わせていく。文化差に意識的に焦点化して違いを解消させるという方法を模索するというよりは、ありのままの自然体で接するようにし、人間として分かり合えるという点に付加価値を認めることで差を乗り越えている。

A段階：「M国はイスラム教なので、お肉駄目じゃないですか。日本のお肉はまず食べれない。洗礼されたお肉だったら食べれるんですけど。来た時も、ご飯を炒めるんですけど、炒める調味料があるんです、M国には。」「入浴は、基本的にバスタブは無い。向こうはシャワー。K国もそうです。」

U段階：「その子はイスラム教の子だったので、食事は本当に大変だった。すごく大変だったんですけど。やっぱり国が違くと、その子の感じ方も違うし、食べる物も違うし、宗教だって違う。大変なんですけど。こっちも勉強になる。」

C段階：「（イスラム教の留学生に）その調味料見せて、これ買ったから、これで炒めた御飯だから、って言ったら、美味しい美味しいって食べてた。」「何かやるぞ、っていう気は、本当にいつもない。自然体なのが一番いいのかなと思って。いつも本当いつも、心がけていることは。」「人と人との出会いっていうか、そういう風になった時に嬉しいっていうか。でも、そういうことって意識してるものじゃない、っていうか。」

## ホストI

Iさんは、留学生の出身国ごとの感覚の違いや行動パターンの違いに文化の違いを認識している。留学生の出身国を訪問するなど積極的に留学生とその後の交流を続ける。違和感をもったゲストの行動に対しては、自分の期待する行動に導くことで解消を試みている。

A段階：「今年はね、U国（の留学生）だったんですよ。感覚的にね、ドライというか、ちょっと雰囲気の違いですね。A地域の子はやっぱり根っこに共通の道徳とかあるでしょ。初めての英語圏の人だった。」

U段階：「ここで料理作りながらお話すんですよ。材料洗ったり切ったり。一緒に手伝いに来る子と、ずっと止まってる子もいます。男の子も一緒にする。洗い物も。この前C国のN地域から来た子は、日本語も出来ない。何も知らない。ここ座ってる。（お国柄）じゃないかな。“お客さん”だから、っていうので。それは、びっくりした。」

C段階：「（何も手伝わなかったゲストが）“昨日の卵焼きがとても美味しかった。私は巻けないんですよ”って言う。私は、目玉焼きにしようかと思ってたけど、“卵焼きにしよう！あなた、巻いてごらん”って言った。で、（巻き方を）教えて。」

## ホストL

Lさんは、文化による行動の違いや、その国の状況による考え方の違いについて、留学生との交流を通じて学んでいる。日本文化からは受け入れられ難い、夜騒ぐといった行動については、日本の行動規範から外れていることを、我慢せず直接的に伝えている。

A段階：「日本人だけだと、あそこまでワーワー言えない。音楽に合わせて踊ったりする。」「S国の人とか、ピクニック行ったり、バック風景、荒地とかそういう風景。全然違いますね。帰って何が一番したいって聞いたら、“戦争のない国にしたい”っていうのが一番ですね。」

U段階：「私たちと来た子と、夜の時間帯が随分ずれるんですよ。遅いんですよ。それも、日本人だとわりと静かに勉強したりする。それを、カラオケ歌ったり。近所の人が“随分賑やかだね”って。」

C段階：「注意しました。“悪い”って。“どうして駄目なんだ”って（聞かれた）。“日本ではそういうのは、駄目なんだから”って（説明した）。」

## 3-2 タイプⅡ ACの2段階の学習がみられたが、U段階の学習がみられなかったホスト

2つ目のタイプは、文化の違いに対する気づき（A段階）はあるが、文化の違いが葛藤や戸惑いの原因になることについての理解（U段階）を持っていないタイプである。U段階の理解を持つことが無いまま、文化差への対処（C段階）は行うことが出来ている。Bさん、Cさん、Eさん、Fさん、Hさん、Pさんがこのタイプに分類された。

## ホストB

Bさんは、生活習慣の中での文化の違いを認識し、それによる行動パターンの違いについて理解していた。しかし、文化の違いが異文化間の葛藤を引き起こすということを認識している旨の語りはみられない。起こったトラブルは、文化差が原因かどうかの分析はなされず、そのトラブルの解消に向けた現実的な対応がなされていた。

A段階：「結構A地域の子とか、暑い国の子はお風呂につかる習慣がないので、怖いとかいう人もいました。」「S地域の子なんかだったら、本当に結構羽を伸ばすんですよ、T人とか。（自国では）いつも親が送り迎えとかしてる状況で。日本だったら、一人で行くけど。」

U段階：該当する語りなし

C段階：「必ず帰る時間は、うちは市内に近いのでとりあえず何時から何時までよ、ということで。遅くなるんだったら電話してこないといけないよ、ということを必ず言って置きました。」「帰ってくる時間とかも、一切守らなかった子とかもいたんですよ。でも、その子にはきつく言いました。」

## ホストC

Cさんも、Bさんと同様、文化差の認知はあり、違いへの対応は出来ているが、異文化葛藤に対する気づきはない。つまり、文化の違いは摩擦を引き起こすものではないと理解されている可能性が高い。文化差は肯定的に捉えられ、違いがあっても同じ人間として共生出来ることが素晴らしいという。その文化差肯定の認知を持って、ホームステイは肯定的体験として意味付けられ、葛藤を想定しない交流が実現している。

A段階：「文化の違いって色々本当にあるからね。私も知らなかった。K国の方来られた時にね、足を、膝を立てるのよ。座る時に。」「テーブルに座る時でも、とにかく足はこういう感じだった。」「でも、それ、私、聞いてたから。K国の文化の違いっていうのをね。」

U段階：該当する語りなし

C段階：「来られる時には、ある程度、文化の違いっていうか、そういうのもまあ勉強を一応していたら違うんじゃない？」「ある方から、C国の方はね、だいたいお昼抜いて二食よ、と（聞いていた）。でも、来た時に伺った。“お昼どうなの？”って。“いや、三食食べますよ”って言われたの。だから、食べ方も色々。そうやって、人から聞いていた分とは違ったりするから、確認させていただきながら。」「言葉も違い、文化も違い、でももう本当に心と心。違う方がよその国から来られても、同じ人間同士。地球人みたいにお話出来る。そういうことも、異文化コミュニケーション。それが素晴らしいなってると思う。」

## ホストE

Eさんは、文化を習慣の違いとして捉え、その違いを楽しんでいる。日本の習慣と留学生の出身文化の習慣を織り交ぜて併存させ、無理に強制しない形で日本文化を選択肢として与えたり説明したりしている。文化の違いについては、楽しめる程度の差異しか認知しておらず、よって葛藤も想定されていないと考えられる。

A段階：「習慣とかそういうものの違うな、って。そういう驚きがあるのが楽しい。」「お風呂は、お湯ためたりしない。だいたい皆、シャワーだけ。」「向こうの人は習慣として、いっぱい仕事してても、週末にはのんびりする。」

U段階：該当する語り無し

C段階：「O国の人もナイフとフォークを出しても、お箸ちょっと使って（と勧める）。来られる人は日本のこと知りたいと思ってるし、あまり向こうの習慣にしてあげるよりは、こっちの習慣をと思って。」「とりあえず、男の子だったら、“お風呂どうそ”って言って、旦那が、こうやって使うんですって使い方を教えてあげたら、もう、シャワーだろうが、朝入ろうが（気にしない）。」

## ホストF

Fさんは、食べ物を始めとした日常的な習慣に表れる異文化について、気づきを持っている。しかし、その違いが葛藤原因になるとの認識に関する語りはみられなかった。文化の違いによる不適切な行動については、指摘したので困らなかったと語る。楽しいことが多いと語り、やりすぎないことを心がけているという。文化差のある相手に対しても、日本人に対する場合と同じように、自然体で接することがホストとしてうまくいく秘訣であると認識している。このように認知面での文化一般的対処をすることで、異文化の相手との交流を楽に実現している。

A段階：「やっぱり、食べられない物、宗教上。そういうのは、気をつけます。食べられない物を調理に使ったりとか、気を付けます。」「皆、靴は一応脱いで上がって。スリッパ履いて座敷まで行く場合も。畳の所で、日本人は脱ぐけど。」

U段階：該当する語り無し。

C段階：「別に困るというよりは、ビックリ、かな。」「ここで（靴を）脱いで、って言えば困らない。土足で上がって来た人はいないし。」「本当に教えられることの方が多い。楽しいことの方が多い。」「なんでもやりすぎないということを、全ての面において。それはいつも（心がけている）。どこか行けばいいっていうものでもないし。とにかくやりすぎないっていうか、自然体で迎えられるよ

うに。」「こっちが身構えると、相手も身構えるだろう、と。日本人でも一緒ですよね。」

ホストH

Hさんは、各国の留学生を受け入れる経験を通して、お風呂や食べ物の違いなど日常の行動や生活習慣上の違いがあることに気づいている。しかし違いは、葛藤因としては捉えられず、相手の気持ちを尊重してそのやり方に合わせていく。習慣上の違いに関して、一応の説明はするが強制はしないので、相手のやり方が温存されていく。各国のゲストと接するのは楽しく、暖かい気持ちで接すれば、ゲストにとってもよい体験となるという。

A段階：「私はね、一番最初、トイレの使い方、ウォシュレットの使い方教えます。ウォシュレットは無いですから。世界各国で日本しか。」

U段階：該当するコメントなし

C段階：「今の人はほとんどお箸（を使える）。逆にお箸が上手とか褒めたらいけない時代ですからね。」「皆（湯船に）入りません。シャワーだけ。私は湯船の入りを教えますけど。湯船に入る前に、体をちょっと洗ってから入って、って。お湯を綺麗にキープしといてね、体を温めるため、リラックスのためだから、汚れは一切落としてね、って言う。でも、入った形跡ないです。」「朝シャワーですね。でも、私は夜入ってほしいんですよ。そうしないと、布団も嫌だし。汗かいたまま寝て欲しくない。だから、（夜も）入るけど、だいたい基本的に朝晩入る。冬場は私も気を遣って（入る前に温風で）温めたりします。」「相手の気持ちを尊重して、何がしたいとか、どういうことをしてみたいとか、思ってることを、尊重した方がいかなと思います。」「とにかく気持ちで。温かい気持ちで接していれば、少しは相手も普通の日本の家庭でホームステイして、来てよかったなって思ってくれれば。」

ホストP

Pさんは、国によって人間の性質が違ふと知覚している。しかし、違いが葛藤を生み出しうることについて触れた語りはなく、文化差への対処は、もっぱらゲストのやり方に合わせるというスタイルを取る。短期のホームステイのため、違いも合わせる事が出来る範囲内に留まっていたためであると考えられる。

A段階：「人と人として付き合うというのは、すごく楽しい。ただ、何カ国か同じ国の人が来るでしょ。人間は違うけど、国は同じ人が。そうすると、やっぱり傾向はある。」

U段階：該当する語り無し

C段階：「どういうことはない。好きなようにしてもらう。食事も、差し支えない範囲で。こっちが控えればいい。あちらに合わせてあげればいいっていう気持ちでいけば大丈夫。あちらは、日本のことは分からないとか、不安を持ってる。長いこといても、まだまだ馴染めなかったりするわけだから、こちらがあちらを優先するっていう考えでいけば大丈夫。」「パンがいいって言えば、パンにするし、パンケーキが良いって言えば、パンケーキだけ。ご飯と味噌汁って言われれば、そうするし。」

### 3-3 タイプⅢ A段階のみの学習がみられたが、U段階及びC段階の学習がみられなかったホスト

3つ目のタイプは、文化の違いに対する気づき（A段階）のみがあり、文化の違いが葛藤や戸惑いの原因になることについての理解（U段階）や、文化差への対処（C段階）に関する語りが見られなかったものである。Jさん、Mさん、Oさんが、このタイプに分類された。

ホストJ

Jさんは、国による習慣の違いとしての文化の違いに気づいている。しかし、困ったことはないと言語、文化の違いによる違和感に関する語りや、文化差への対処があった旨の語りも見られない。A段階のみのタイプと認められる。

A段階：「K国の子は、シャワーしか（使わない）。（湯船に）つかる習慣がないっていうか。冬で寒くても、普通にシャワーで。」「困ったことはない。ないですね。全然ないです。ご飯も普通。いつも通り

だし。一応好き嫌いとか（予めプロフィールに）書いてあるし。」

U段階：該当する語りなし

C段階：該当する語りなし

ホストM

Mさんは、コミュニケーション・スタイルの違いとしての文化の違いに気づいている。しかし、文化の違いによる違和感に関する語りや、文化差への対処があった旨の語りも見られない。A段階のみのタイプと認められる。

A段階：「あの興味深さっていうのが、どうやって育てたらこんなに興味深く育つのかなって、思う時があります。あとは、YES、NOがちゃんと言えたり。あんなに立派にモノが言えるのがえらいな、と思いました。」

U段階：該当する語り無し

C段階：該当する語り無し

ホストO

Oさんは、習慣や生活様式の違いとしての文化の違いに気づいている。しかしながら、文化の違いによる違和感に関する語りや、文化差への対処があった旨の語りはなく、A段階のみのタイプと認められる。

A段階：「彼らは、日本の文化を経験しに来てるんだけど、逆に僕らが外国文化を知る機会にもなる。色んことを、食事だってそうだろう。生活様式だって、違うし。いやもう、いい勉強させてもらってる。」

U段階：該当する語り無し

C段階：該当する語り無し

#### 4. 考察

今回のホストの中で特徴的だったのは、AUC-GS学習モデルが想定していたU段階に関して、文化学習が行われていないホストが多数いたことであろう。つまり短期間の異文化接触とはいえ、ゲストを身近に招き入れる接触密度の高い異文化交流においても、葛藤は想定されず交流が行われていたということになる。その中でJさん、Mさん、Oさんの3名は、文化的差異への対応に関係した語りはみられず、Bさん、Cさん、Eさん、Fさん、Hさん、Pさんの6名については、文化差から生じうる文化内因的葛藤を想定した対応ではなく、葛藤を引き起こさない程度の表面的文化差を認知面で肯定的に捉えていくことで差を解消するという対応がみられた。前者の3名については、異文化接触の程度が浅いため、異文化葛藤も文化的差異による不都合も発生しておらず、文化差への対応がなされる必要がなかった可能性が考えられる。後者の6名についても、同様に接触の程度が浅かったため、異文化葛藤を解決する必要性のある場面に遭遇することはなく、単に、「文化差」をどう捉えていくかという認知面での対処のみで事足りた可能性がある。比較的中長期のホームステイファミリーの異文化対応について調査した奥西・田中（2013）は、異文化葛藤を意識した対処が、異文化対応がうまく果たせることの前提には必ずしもなっておらず、非深化的文化差に対しては、今回のような国際交流への肯定的認知を先行させることでも、ホームステイ交流が成り立っていることを報告している。つまり、ホームステイ交流における対処は、「肯定認知対処モデル」が最も一般的に成り立ちうると考えることが出来るだろう。

その一方で、今回のような比較的短期間の受け入れを担うホストファミリーにおいても、AUCすべての段階を経た文化学習が行われているケース（Aさん、Gさん、Iさん、Lさん）もあった。比較的長期のホームステイ交流と比べて、短期ホームステイ交流は、ホストの異文化への気づきが表面的なことに集中しがちであり、ホストとゲストが互いに譲歩しながらルールを定めるといった必要性がないため、互いの文化差をそのまま保つことが可能である。しかしながら、このような必ずしも密度の濃くない異文化接触においても、ホストが異文化の存在に気づき、違和感を感じたりする中で、異文化葛藤の可能性について理解し、特定文化にまつわる知識を獲得することで予防的な対処を行うとか、日本文化を説明するといった対処を示すようになっていく。これには、比較的長期のホームステイ交流における異文化接触体験と類似の学習構造を指摘するこ



とが出来よう。奥西・田中（2013）の調査では、AUC全ての異文化学習の段階を充足したホストにおいても、C段階の対処は、特定文化の認知や行動面に配慮した文化特定の対処よりも、あらゆる文化出身者に適用出来る文化一般的対処の方が多く使われていたことが報告されているが、本調査においても、「率直に意志を伝える」等の文化一般的対処の方がより多く使われていた。例えば、Aさんは、外国人にとって分かりにくいとされる曖昧な表現を避けて直接的な物言いをするという文化一般的対処を使用して効果的にコミュニケーションを図っていると認められたが、特定の国に対する文化的知識が不足していることで、効果的な文化特定の対処が出来ていなかった。このような場合は、ホストが文化的知識を増やすことで認知面の理解が向上し、文化差を埋めていけるような対処が行われるようになっていくのではないかと考えられる。

短期ホームステイ交流を通じたホストの異文化に関する学びのタイプ分けは、以上の3タイプに分岐していた。葛藤想定の対処は比較的少数であったが、ホストが今後、比較的長期の受け入れを体験する等、異文化接触の程度が深化していくにつれて、ホストの異文化に対する学びも「肯定認知対処モデル」から「葛藤想定対処モデル」へと変化していく可能性がある。また、このような短期ホームステイ交流のカウンターパートであるゲストは、ホストの多くが肯定認知対処をベースとした交流を行っていることに鑑みると、友好的な雰囲気の下、好意的に家庭に迎え入れられることで、ホストに対する好印象や信頼感を抱くようになることが考えられる。その一方で、ゲストの日本滞在が比較的長く、日本文化・社会に関する葛藤を抱えているような場合は、肯定認知対処だけでは不十分で、ホストが日本人の考え方や価値観を説明したり、日本人の行動の真意を説明したりといった、ゲストの誤解を紐解くための適応支援が必要になってくるだろうと思われる。ホストの文化学習が、文化差を肯定的認知で埋めていくというAC的な対処のみならず、異文化葛藤を想定して解決していくというAUC的な対処が出来ようになるまで進むことは、ゲストである留学生の異文化適応支援が促進される可能性が高まることを意味し、そこに教育的価値を認めることが出来ると思われる。

#### 参考文献

- 1) 廣田陽子・岡益巳（2009）週末型ホームステイ実施方法の改善に向けて 岡山大学経済学会雑誌 41(3), 1-17.
- 2) Nakano, S., Okunishi, Y. & Tanaka, T. (2013) Interpersonal Behavioral Conflict of International Muslim Students in Japan in Intercultural Contact Situations The 10<sup>th</sup> Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia August 24.
- 3) 岡益巳（2005）週末型ホームステイの実施とその問題点 広島大学留学生教育 9, 37-53.
- 4) 奥西有理・田中共子(2009) 多文化環境下における日本人大学生の異文化葛藤への対応－AUC-GS 学習モデルに基づく類型の探索 多文化関係学 6, 53-68.
- 5) 奥西有理・田中共子(2013) 地域国際交流の場におけるホストファミリーの異文化接触対応スタイルー自然発生的な文化学習類型の探索 質的心理学研究 12, 6-23.
- 6) 奥西有理(2012) 中国人留学生との対人交流における日本人ホストの異文化性認知 留学生教育 17, 99-105.
- 7) 田中共子・藤原武弘(1992) 在日留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較 学生相談研究 24, 41-51.
- 8) 田中共子(2000) 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 9) 田中共子・中島美奈子(2006) ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み 異文化間教育 24, 92-102.
- 10) 横田雅弘・白土悟(2004) 留学生アドバイザー ナカニシヤ出版

# The structure of learning in short-term host families

## — An analysis of cognitive and behavioral responses using the AUC-GS learning model —

Yuri OKUNISHI, Tomoko TANAKA<sup>\*</sup>, Yuko INOUE<sup>\*\*</sup>

*Department of Biomedical Engineering, Faculty of Engineering,  
Okayama University of Science,*

*1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

*\*Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University*

*\*\*Faculty of Letters, Okayama University (graduated)*

(Received September 26, 2013; accepted November 5, 2013)

In order to grasp the structure of learning of Japanese families during their short-term hosting of international students, semi-structured interviews were conducted with 13 Japanese host families. These hosts have accepted international students for short terms of two or three days. They were asked about their intercultural learning experiences during these visits, and their narratives were analyzed with the framework of the AUC-GS learning model. The informants were examined with regard to whether they had an awareness of the existence of cultural differences (Awareness: A stage), understood the possibility or occurrence of cross-cultural problems (Understanding: U stage), and successfully coped with those problems (Coping: C stage). After the results were analyzed, the informants were divided into three categories: AUC, AC, and A types. Some informants exhibited considerable awareness of cultural differences, understood intercultural problems, and coped well; however, a majority lacked an understanding of the intercultural conflict that could possibly occur with international guests. The pedagogical implications of hosts' intercultural learning are discussed.